

インフルエンザが小康／熱性けいれんについて

今シーズンのインフルエンザは例年より早く11月後半には各地で警報レベル(30人)を超え、12月に入っても高止まりしていました。冬休みでやや減少し、1月18日までの1週間で大阪では8.18人(前週8.09人)となっています。大阪市西部13.60人、大阪市北部10.85人、南河内9.70人、北河内9.68人がやや多めです。

現在流行しているのはA型H3N2ウイルスの変異型「サブクレードK」で、今シーズンのワクチン株決定後に台頭してきた株のため心配されたのですが、イギリスからの報告によると発病予防効果は従来A型H3N2ウイルス並み(大人で32~39%)に保たれているとのこと。子どもではさらに予防効果は高いとされていますが、いずれにせよワクチン接種のみでは発病が防げないことが多いので、手洗いやアルコール消毒をこまめに行い、マスクを着用し人混みをなるべく避けるとともに、部屋の換気や加湿を心がけてください。

新型コロナウイルス感染症の定点あたり報告数は、1月18日までの1週間で、全国が1.54人(前週1.58人)、大阪0.67人(同0.71人)で少ない状況です。毎年冬には12月から増加するのですが、今シーズンは今のところその兆候が見られません。

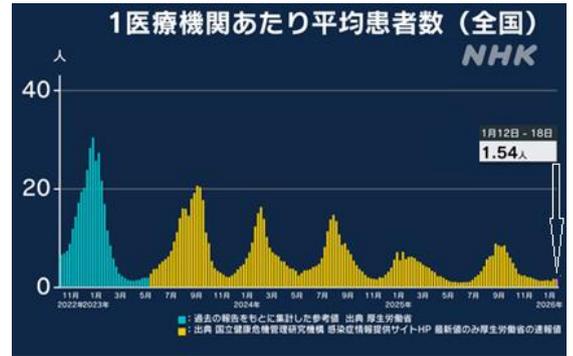
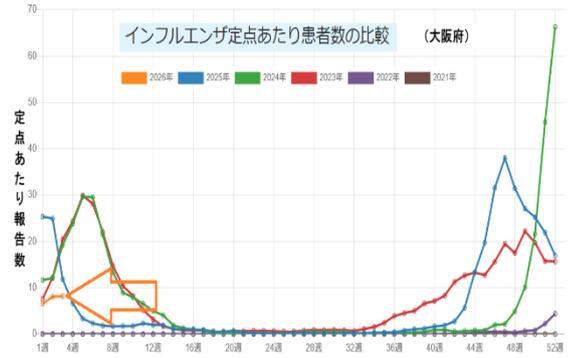
感染性胃腸炎の報告数が1月18日までの1週間で5.10人(前週4.50人)と増加してきました。1歳児が14%を占めています。昨年は1月下旬から急増して2月には10を超えていますので、これから十分な警戒が必要です。

熱性けいれんについて

熱性けいれんは、6カ月~5歳ころの乳幼児が急な発熱に伴って意識障害、けいれんを引き起こす病気です。通常は38℃以上の発熱時で急激に体温が変化するとき起こり、発熱後24時間以内に起こすことが多いです。30%近くが繰り返しますが、成長に伴い6歳前後でほとんど起こさなくなり経過は良好です。熱性けいれんは日本では小児のおよそ8%にみられ、欧米よりも多いといわれます。なお、てんかんに移行するのは3~5%といわれます。

子どもがけいれん発作を起こすと保護者の方などもびっぴりしますが、最も大事なことはパニックにならずに落ち着くことです。ほとんどの熱性けいれんは5分以内に自然に止まってきます。まず、倒れたり物にぶつかってけがをしないように、安全な場所に横に寝かせましょう。吐くこともあり、顔や体を横向きにして、息がつかまらないようにしましょう。口にものを噛ませるのは、呼吸をできなくする可能性があるのやっつけはいいけません。持続時間や左右差などけいれんの様子確認し、可能であれば動画を残しましょう。発作終了後、通常は意識が回復しますが、眠気、不機嫌、混乱した状態が続くことがあります。また、発作後に一時的な麻痺(トッド麻痺)が生じることがありますが、熱性けいれんであれば後遺症を残すことはありません。

緊急受診の目安はけいれんが5分以上続く、24時間以内に繰り返す、けいれん回復後も意識が戻らない、生後6か月未満の乳児、38度より低い熱でけいれんを起こした場合です。



熱性けいれんの対処法

<input type="checkbox"/> 発作が5分以上続く <input type="checkbox"/> 発作がおさまっても意識の戻りや顔色が悪い	1つ以上当てはまる	救急車を呼ぶ
<input type="checkbox"/> 38℃より低い熱でけいれんを起こした <input type="checkbox"/> 初めてけいれんを起こした <input type="checkbox"/> けいれんに左右差がある	1つ以上当てはまる	かかりつけの小児科へ 休日夜間診療所 救急医療機関を早急を受診
しばらく様子を見る	当てはまらない	症状が変わらないもしくは、悪化